

道」構成要素間のリンクの再生を目指しているものと総括できよう。これらの運動には、佛所護念会教団・解脱会・念法眞教・崇教眞光など様々な教団が協同している。それぞれの教団が内包する宗教ナショナリズムは多様である。だが、主に天皇崇敬という点をめぐって共通性を有しているため、「〇異端」でありながら、「正統」的宗教ナショナリズムに収斂するような形で合同が可能となっているものと言える。

翻って、自前の政党を結成し政治進出する―特定(主に自民党)候補支援ではなく―場合はどうであろう。創価学会―公明党(文化部 五四)の場合、日蓮正宗教学を基盤とする二代会長・戸田城聖の「王仏冥合論」「国立戒壇論」があり、政治進出の目的は「国立戒壇の建立だけ」で、宗教ユートピアの実現にあると明確に述べていた(七〇年に放棄)。オウム真理教―真理党(八九)の場合、日本から指導者が出て「シャンバラ化」が進むという日本中心主義とユートピア観があった。また、終末論に基づく既成政治と日本の現状に対する批判意識が強かった。幸福の科学―幸福実現党(〇九)の場合、経済的優位性と霊的特性を基盤とした宗教ナショナリズムを内包していた。また、日本社会への鋭い現状批判と宗教的ユートピア志向を有していた。これらの事例はいずれも、皇室崇敬を基準とする「正統」的宗教ナショナリズムとは一線を画しており、独自の現状批判の眼と宗教的ユートピア観を有した「H異端」と見なせる運動であった。むしろ他の要因も考慮する必要があるが、この特性が独自の政治進出を後押しする一つの大きな要因となったことを指摘できるだろう。こうした作業を精緻化し、

近現代を俯瞰するような枠組を検討し、宗教団体の政治活動・進出について国際比較できるような議論の土台を整えるのが今後の課題である。

天皇と黎帝・将軍と鄭王

―日越国家祭祀比較研究序説―

井上 智 勝

前近代の東アジアの政体は、中華・朝鮮にみられるごとく世俗権力と祭祀権が一致するのが基本形態であった。しかし近世期、中華帝国の東縁と南縁にあった日本とベトナムは、ともに朝廷の臣下の形を取りながら、軍事的優越者が執柄の権を握る「帝―霸王」という政体を有した。日本における天皇と征夷大将軍、ベトナム後黎朝後期(大越国)における皇帝黎氏とChúa(主、公侯の意)鄭氏である。同じ漢字・儒教文化圏に属しながら、時を同じくして一見相似した国家権力の形態が現出していることは注目される。その比較検討は、近世日本の国家権力、就中祭祀権を理解する上でも重要である。

元和元年(一五三三)阮淦・鄭検らによって進められた後黎朝再興は光興十五年(一五九二)に達成される。この過程で鄭氏が増長する。鄭氏は、阮氏を富春(順化)に追って、光興二十二年には王に封じられ、王府を開設して政権を握る。ただ、祭祀権は黎帝の許にあった。だが、祭祀施設の創設・修造などは、鄭主を中心に行われた。ベトナムの国家祭祀の中で最重要

の天地を祀る祭祀施設南郊壇殿舎も、景治元年（一六六三）鄭主を中心に修造された。鄭主は黎帝に成り代わって、南郊祭祀を摂行することがあった。国家祭祀を帝が親祭せず臣下が代行することは、有司摂事として一般的であったが、鄭主の場合は「輔臣請如帝親幸之儀」（保泰五年〔一七二四〕春「大越史記全書」續編卷之二）と帝同様に振る舞う期待を受けていた点で度を超えている。鄭主はその名分を冒すことはなかったが、その一歩手前で、国家祭祀の事実上の主宰者として活動していた。鄭主が黎帝を倒し自ら登極しなかったのは、篡奪政権と位置づけて莫朝を打倒して後黎朝を再興したという大義名分と、富春に追い遣った好敵手阮主の存在であったと考えられる。

翻って日本の事情を見よう。江戸幕府は、伝統的に天皇・朝廷が担ってきた国家祭祀対象の神社を修造した。しかし、徳川将軍家や江戸幕府が、天皇・朝廷が掌握する祭祀権を奪取したり、積極的に代行することは、大局的に見てなかった。徳川将軍家の年中行事に組み込まれた祭儀は、その殆どが自家の追善に関わるもので、国家祭祀とは言い難い。

このように同じく帝を戴く霸王でも、鄭主は祭祀権の代行に積極的であり、逆に徳川将軍は祭祀に対し淡泊に見える。この差違は、東アジア規模において近世日本の国家権力を理解するための重要な論点である。本報告で答えを出すことはできないが、有効と考えられる視点を示しておく。両国両様の「小中華意識」である。ベトナムは「南国」すなわち南の中華帝国という小中華意識を有した。ベトナムは中華帝国から見れば「安南国王」などの称号で冊封を受ける諸侯国だが、ベトナム自身は

「北朝」たる中華帝国と「天」を分け持つ「南国」で、独自に国号を定め、「皇帝」を擁し、中華帝国と対等外交を展開していると認識していた（古田元夫『ベトナムの世界史』）。それゆえ、儒典に則れば「天子」にのみ許される南郊祭祀を行い得たのである。とはいえ、ベトナムの国家祭祀は、中華帝国に範をとって行われていた。かかる国家祭祀のありかたは、当時の東アジアの国際標準であった。したがって、権限さえ得られれば、祭祀を担う者の系譜は問われない。

かたや日本の小中華意識は「神国」として顕在化する。「神国」を弁証するのは八百万の神々であり、高天原の主宰神天照大神の子孫とされる天皇であった。近世初期の日本において、より普遍性を持つ「天道思想」は一定のイデオロギーとなっていたが、それすら「神国」と不可分の形でしか展開しなかった（高木昭作『将軍権力と天皇』）。かかる点に、徳川将軍家が国家祭祀への関与に消極的に見える根拠があると考えられよう。なお本報告は科研費基盤研究（C）（研究課題番号二一五二〇〇九一）による成果である。

大学における宗教教育に関する認識と期待

荻野 勝行

我が国の大学等の高等教育機関には、特定の宗教が基盤となり、その宗教のエッセンスを建学の精神や教育の理念としているものが多数ある。主にこのような大学等においては、その宗